

24. 放射線膀胱炎の治療経験

橋本 透*¹⁾ 笹川五十次*¹⁾ 久保田洋子*¹⁾
 中田瑛浩*¹⁾ 千見寺勝*²⁾ 樋口道雄*²⁾
 斉藤春雄*²⁾

(*¹⁾山形大学医学部泌尿器科)
 (*²⁾斉藤労災病院)

であると考え。さらに、第1種装置、第2種装置間に効果に差がないという結論は症例数が少ないため、慎まなければいけない。しかし、放射線膀胱炎に対し、今後、より安全な第2種装置を使用するつもりである。

【目的】放射線膀胱炎患者21例について高圧酸素療法 (OHP) を施行し、その両治療法の治療効果を検討した。

【方法】酸素濃度100%にて絶対圧2気圧、60分～90分の加圧群11例と酸素濃度30～35%にて絶対圧2気圧90分の加圧群8例を、それぞれ症状、総照射線量、照射後病状発現までの期間、OHPの頻度、膀胱鏡所見について比較した。

【結果および考察】100%酸素濃度にてのOHP治療群では、改善8例、不変3例であった。改善例の平均年齢は67±3歳、不変例のそれは69±8歳であった。総照射量は改善例で55±2Gy、不変例で78±3Gyであった。照射後病状発現までの期間は改善例で4.8±1.5年、不変例は8.3±3.8年であった。一方、30～35%酸素濃度下でのOHP治療群では、改善7例、不変3例であった。改善例59±2歳、不変例74±3歳であり、総照射量は改善例57±1Gy、不変例74±3Gyであり両者の間に有意の差 (p<0.001) が認められた。照射後病状発現までの期間は改善1.8±0.2年、不変3.4±1.1年であった。酸素濃度100%のOHP治療群と酸素濃度30～35%のOHP治療群を比較すると、前者は高齢で照射後病状発現までの期間は後者に比し長かったが、他の条件は後者と大きな差はなかった。治療効果は前者治療群患者の75%が有効であり、後者のそれは70%が有効であった。結論として酸素濃度が30～35%であっても、100%であっても加圧条件が同じ2絶対気圧で、OHP治療回数を40回以上施行すれば比較的良好な治療成績が得られることが推測された。